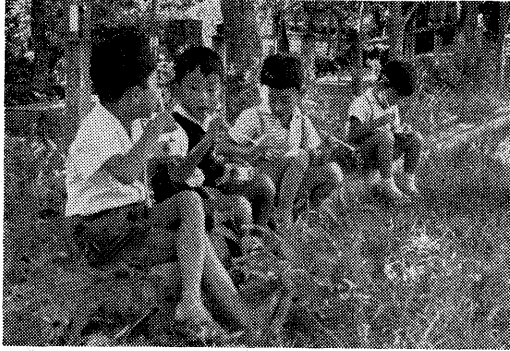


相談事例の夏期合宿について

平井 信義 千羽喜代子
野田 幸江 岸本 慶子



われわれの行なつて

いる夏期合宿の治療経過および経過報告はすでに保育学会に二回に

わたり、また「教育と医学」八巻二号に誌上発表したところから、それらを参考にしながら御一読を願うしいである。

夏期合宿も今年で第四年目を完了し、計画する側も大分余裕をも

つことができるようになってきた。

これまでにとりあげた問題は「夜尿症」、「食欲不振」、「引込み思案」神経質を主訴とした社会性のない子ども」など、毎年主題を異にしている。

いずれも四才より七才までの子どもを対象とし、毎年男児は女児に較べて若干多い。本年は男児二九名、女児一四名、計四三名となり、男児がかなり多いが、今回のような主題は男児にはらう親の関心が大きいのであろうか。三、四の相談所の外来を通して参加した者が大部分である。

対象の選択は親の訴えによるもの、幼稚園・小学校教諭からの要望によるもの、相談所を訪れたものうちで諸検査の結果該当するものを、予め各相談所から選出、全体会議にかけ決定する方法をとった。なお集団構成人員には約1/3の正常児が含まれている。



これは親の側からの参加要望が強くことわりきれなかった事例が多いのであるが、これまでの経験では集団形成のために正常児を含めることが有効であったからでもある。

治療者側の人員構成は本年は、医師三名、臨床心理相談員九名、幼稚園教諭一名、栄養士一名、保健婦一名、学生五名、手伝い三名から成っている。

これら治療者間の親睦をはかり、また治療方針、治療方法のうちあわせのために合宿前に数回の会合をもった。

合宿を計画した目的は、①子どもの行動観察を昼夜を通して行うことにより充実させ、治療の方針を確立させる、②子どもを家庭から隔離することによって、家庭において親が問題としている子どもの行動の再検討を行なう、③子どもを手離した親が、その期間中に何らかの洞察を得ることを期待する、④子どもには、家庭を離れ

ての集団生活の体験から、何らかの人格の変化が起きることを期待するとともに、自立性を養う、⑤集団治療の新しい方法の確立を目ざし、治療者側の人格の変化・向上を期待することなどであった。

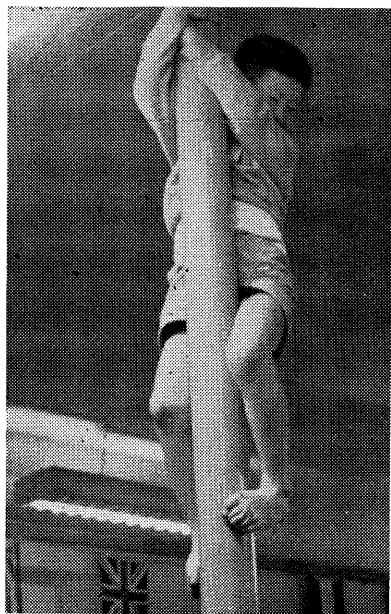
これらを通じて先ず言えることは、外来における母親の主訴と、合宿中の子どもの行動とが非常に異っていることである。例えば家庭・幼稚園では始終めそめそしていてメソ子さんと呼称されていた女兒は全くその面影がみられない。母親の着物にしがみついて母親から離れようとしぬい男児が、合宿中は攻撃性が強く、多分に自己顕示が強かったなど。このことは種々の意味が含まれていると考えられる。

何しろ一昼夜一週間、延一四八時間の保育はなかなかからくではない。子どもをあずかっているという責任感是非常に重い。家庭から離れているので、特に母代りとしてのラポート（親和感）をつけることにつとめる一方、同時に治療者、観察者として子どもに接することになる。われわれにとっては一つ一つの場が観察室であり、かつ治療室であるため、一刻一刻をいかに対処すべきか、常に心を働かせていなくてはならない。場合によっては、子どもの扱いにつき治療者間の意見が異なることもある。

それを助けてくれるのが、子どもたちが寝しなくなった後、毎晩八時ごろからもたれるケース討論会である。手帖にメモした観察事項、あるいは自分のとった処置の反省および批判など、各個人一人

ひとりにつき一日の生活状態を把握しながら翌日の方針をたてるのである。昼間の生活を再びおもしろくおこして笑いかみしめることもしばしばである。しばしば深夜一時におよぶこともある。われわれにとってはもっと時間がほしいのであるが、明日の保育のためにほぼ十二時を限度としている。この間「先生！ オシッコ」といって起き出してくるもの、寝言に驚かされることも度々ある。

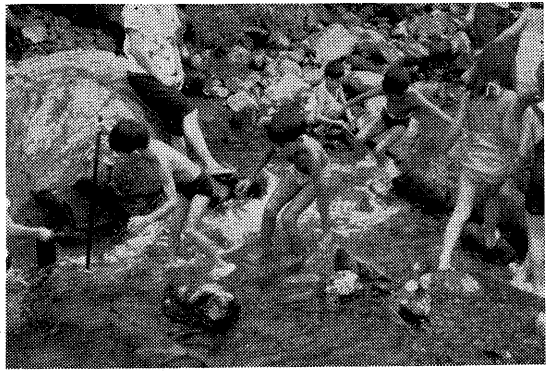
このケース討論会は一日の保育の後で、かなりの身体的疲労をおぼえているところからオーバーワークの憂いもなくはないが、しかし合宿期間中、子どもに対するわれわれの態度のうちあわせ、治療計画をたてる上からどうしても欠かせぬ日課である。遊戯室内だけでの子どもの接触ではないために、治療者間の連絡は相当綿密に



行なわれていなければならない。五、六人の子どもに二人ずつの担当者があるのであるが、しかし子どもたちは本人の要求に応じて行動するから担当者の側にいるとは限らない。したがって全員の子どもの様子を治療者の一人ひとりが把握していなければならないのである。

われわれの合宿は、あくまでも集団を通しての個人の治療を目的としているため、合宿中の日課も教育的目的からみれば大分かけはなれているかもしれない。大まかな日課および日程で、起床、散歩、食事、入浴、就寝などの時間割は定めてあるが、家庭の延長として自由遊びを多くし、なるべく自然の中で生活させる機会を多くしている。特に今までの参加者のほとんどが都会の子どもであるからには、大自然に接する好機会でもあろう。

集団行動のとれない場合はよほどのことのない限りは強制しないで自発性の現われるのを待つのがわれわれの基本的な態度であるが、特に強調したいのは、子どもとともに遊戯をすることで、布団の上で角力をとったり、チャンバラの道具を用意し、子どもにその機運が起これば治療者も積極的に遊びに入った。もちろん男女の性差にかかわらずである。部屋の中央にある丸柱によじのぼり、や々と頂上まで登れた時の子どもよろこび、ビニールの刀がほしくてたまらないのであるが年上の子どもに占められて手にすることのできない年下の男児が、やっと手に入れて治療者をつつけしだいたた



いて歩く子ども、まさにか
れらにとつては抑圧・禁止
の非常に少ない自由な遊び
場なのである。

一般的な見方としては、
この年令で両親より離すこ
とはかえつて障害を与える
のではないかとの意見があ
るうが、われわれもこの点
には非常に細かい注意をは
らっている。六、七才児は
むしろ友人との生活を楽し
んでいる時間が非常に多
い。花つみ、せみ・とんぼ

とり、キャンプごっこなど、その他友人との起就をともにする
こと、すなわち集団生活をするという新しい体験に興味をいだいて
いることは、合宿中の行動、参加後の感想、翌年の参加希望からも
推察される。これに反して、四、五才児の中には初日に啼泣した者
が四―五名ある。特に就寝前に多い。おとなでも夜分になれば感傷
的になりがちであるが、かれらも周りが静かになると家庭を、父母
を想い出すのであろう。そこで就寝前には一人ひとりの手を持った

り、あるいは添い寝をし、寝ついてしまふまで側にいるようにする。
ケース討論を行なっている時、何回も口実をつけて起きだしてくる
子どもには膝に抱いたり、あるいはその度ごとに一しよに寝る。日
中でも、淋しそうに寄つてくれば必ず膝の上に抱き上げる。これま
での経験から、保育者の側の考慮があればこの問題は、解消し易い
と思う。現に、初めの二回の経験では、幼少者においても、母子分
離による障害の心配がほとんどみられなかった。

子どもたちの生活習慣は一応自立できている段階の者がほとんど
であるため、特別の例を除いては、着脱、洗顔、排泄などすべて自
分で行なうことを原則としている。出来ない時だけ手伝う。今年
は着脱用の袋を携持し、これを使用した、個人のものが散らからな
いで非常に役に立った。帰宅後も使用しているものがあるようであ
る。お箸をおくなどの簡単な食事の準備、食器のあとかたづけなど
興味をもって手伝う子どももいる。

保健上の管理をどのように行なっているかとの質問があると思
うが、この点に関しては第一に病気及び不慮の災害の予防につとめ
た。かかる点から合宿の場所は危険性のない所を選ぶことに心がけ
た。病気については合宿前に身体検査を行ない、充分に健康状態を
調べ、合宿中に異常が生じて一応の処置のできるように医療上の
準備を整え、隔離の必要のあるものは個室に入れた。しかし今まで
の経験では一名のカタル性アンギーナを除いては、すべてに障害は

みられなかった。一寸のかすり傷でも医師あるいは保健婦のもとに
く。明らかに接触を求めてくることもあるから、努めていいい
に処置を行なう。入浴は毎夕行ない身体の清潔を保つように心がけ
た。したがって身体の異常以外で入浴を拒否した場合には、第一回
目は強制的に入浴させたが、次回からは、これまでの経験ではほと
んど抵抗なく入浴している。われわれが特に悩まされたのは便秘で
ある。おとなでも環境が変わると便秘がちになるが、今回は約半数が



三日目頃から便通をみ
た。合宿方針にあわせ
るために注射、葉など
の便通剤は用いないこ
ととし、一医師の努力
による腹部摩擦によっ
て全員の便通をみるこ
とができ、ほっと安堵
したしだいである。
乗物酔は歌を歌った
り、お話をしたりする
ことよって退屈さ、
あるいは関心を転じさ
せればかなりの程度ま

で予防できる。母親より訴えのあったもの九名のうち三名が到着前
に嘔吐をもよおしている。

最後に、治療者側の態度としては子どもを如何にアクセプト(受
容)するか、これが根本的な態度方針となるが、その技術的な方法
は各人の性格により一様ではない。むしろ各人の持味を生かしながら
対処しているところに大きな特徴があるといってもよからう。な
お合宿前に三回の会合を持ち、ともに遊びながら子どもとの接触を
保つほか、各治療者が相談所の外来において遊戯療法中の者も含ま
れている。

合宿治療に関しては、治療に対する解釈上の問題、受容と制限
(リミテーション)、その他各種の問題を残しているが、今後
研究を積み重ねてよいものにしてほしいと思っている。今回の合宿にお
いては、その前後および期間中に各種の精神検査、行動観察、およ
び身体検査(特に自律神経機能)を行なった。その成績については
他の機会に詳述する予定である。「引込み思案」の子どもたちを、
かなり詳細に調べた結果は、幾つかの系統に分けて考えることがで
きるようになると思う。

(お茶の水女子大学 千羽記)

